

研究所だより

第466号
2024年 1月12日
発行：土佐清水市教育研究所
TEL 82-3015

“ たこたこあがれ 風よくうけて 雲まであがれ 天まであがれ
絵凧に字凧 どちらも負けず 雲まであがれ 天まであがれ
あれあれさがる 引け引け糸を あれあれあがる 離すな糸を ”
『たこのうた(凧の歌)』 1911(明治44)年 文部省唱歌



寒中お見舞い申し上げます

穏やかだった正月。しかし、年明けから3日続けての炎の映像に息をのみました。過去の経験で「備えあれば憂いなし」のはずだが、防災施策はどうだったのか、多重の安全システムに隙があったのか、火の元はどうだったのかか問われています。私たちも今一度防災施策、システム等について再確認しなければならぬと思います。

各校では3学期が始まり、子どもたちも先生方も新年の決意も新たに、やる気に満ちあふれているのではないのでしょうか。

暦の上では6日は「小寒」。この日から「寒の入り」となり、節分までが「寒の内」と呼ばれ、寒さが厳しくなります。冷え込みが厳しくなるとインフルエンザの流行も懸念されます。また、昨年11月頃から新型コロナ変異ウィルスの「JN.1」(オミクロン株の一種)が広がりを見せています。WHO(世界保健機関)は免疫を逃避する能力が高まっている可能性があるとしている一方、入院や重症化のリスクが高くなっているという報告はないとしています。しかし、1月から2月にかけて、再度、増加するのではないかと懸念されています。これからは基本的な感染対策を徹底することに尽きるようですので、「密を避け、手洗い・うがい、マスクの着用、換気」を心掛けるようにしましょう。

.....

「指導と評価」1月号より

不登校経験者から見た不登校支援の要点

帝京平成大学人文社会学部児童学科講師
むらやま たいき
村山 大樹

1 観点① いま、目の前の子どもへの支援

(1) ゲーム依存・昼夜逆転

令和3年10月「不登校児童生徒の実態把握に関する調査報告書」によると、学校を休んでいる間の過ごし方では、「インターネット・ゲーム・動画視聴」が82%と高くなっています。一方で、不登校経験者に不登校時代のゲームについて尋ねる記事や報告では、「面白くはなかった」という答えも多くあります。

筆者の場合も、自分を責め続ける日々の中で、苦しみから抜け出す唯一の手段がゲームでした。日中起きていて、「学校に行けない自分の人生は終わりだ」「情けない、恥ずかしい、悔しい」「死んだほうがまし」「死ぬことすらできない自分なんて…」と、次々と負の思考のスパイラルに落ちていきます。こうした中で「ゲーム」や「日中眠る」ことが自分の心を保つ・修復するための手だてになっていました。どこか後ろめたさを感じながら、ゲームをしながら泣いていることもありました。

無論、心身の状態に応じて医療的ケアを受けることは必要です。ですが、一見遊んでいるだけに見える行動の裏に、そうせざるをえない理由が隠れているかもしれません。

ゲーム依存症の医療では、いきなり取り上げたり止めさせたりせずに、支援者もその面白さを共感しながら、使用のルールを子どもと一緒に決めていくことからスタートすることもあるといえます(1)。

その子の行動にはその子なりの背景がある。そこに想いを寄せてみることも大切ではないか。これは不登校経験者として得た視点です。

(2) ICTを活用した学び

ICTを活用した学びは、不登校の子どもたちの学びの在り方として広く位置付けはじめています。オンライン上には、多様な学習用教材が存在しています。例えば、筆者が関わる学習支援NPO法人の「オンライン教材eboard」(2)は、『学び直し』をコンセプトに、解説動画と練習問題を提供しています。動画教材はノート画面への板書と音声のみで、講師は登場しません。教室や先生という存在に抵抗感を感じる子ども想定し、「まるで近所のお兄さん(お姉さん)が隣にいて、自分に語ってくれている」雰囲気を作っています。

このように、教材・サービスによって、それぞれに特徴や強みがあります。最近では、メタバース等を利用した支援も各地で始まっています(3)。ここでも大切なのは、集える「場」だけでなく、その子に寄り添う「人」が必要ということです。

ICTは目新しさや便利さに目を奪われがちになります。真にその子どもに必要なツールを見つけていくことが大切です。「みんな」にではなく、「その子に合う」道と一緒に探していくこと、これは支援者の立場から得た視点です。

(3) 学校外の居場所

筆者が調査委員を務めたフリースクール全国調査2022では、フリースクールを利用する子どもにおいても保護者においても、「フリースクールに入って(通わせて)よかった」との回答が90%を超えることが明らかになりました(4)。学校や家庭以外にも、不登校の子どもにとって居場所となりえる場や人が確実に存在しています(図1~3)。学校や教員が子どものすべてを抱え込む必要はありません。外部機関につなぐことを恐れなくてよいのです。

教員による不登校支援の在り方が、従来の「直接的支援」(先生が自分で支援する)から、「間接的支援」(より良い居場所へつなぐ)への転換期に来ているように感じます。多様な学びの価値観のなかで、子どもを社会全体で育てる意識が芽吹きはじめています。これは研究者の立場から見えてきた視点です。

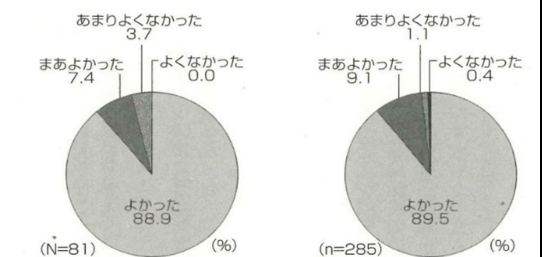


図1 フリースクールに入ってよかったか(子ども) 図2 子どもがフリースクールに通ってよかったか(保護者)

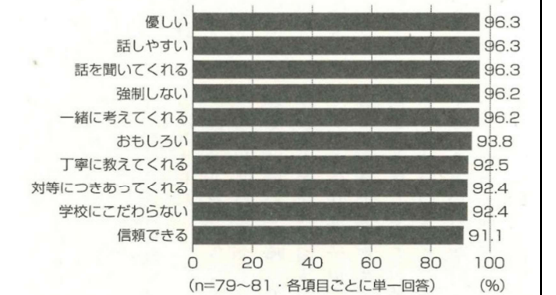


図3 スタッフに対する印象・気持ち(子ども)

表1 不登校の経過段階(筆者整理)

第I段階: 学校に行かねばならないと思う気持ちと、行くことができない自分の間で心身に大きな揺らぎが起こる段階
第II段階: 登校できないことで、学業・人間関係、家庭生活等これまでの日常を喪失していくことに大きな失望感を抱く段階
第III段階: 家など特定の場所での生活することに慣れ、比較的穏やかに過ごすことができる段階
第IV段階: 外界に興味が出て活動が活発になる、学校や外部機関等への出席・進路選択について前向きな気持ちが出てくる段階

2 観点② 中長期的な見通し

(1) 社会復帰に至る不登校の「経過段階」

不登校の支援の中で、「不登校の子はこの先どうなるのか」「支援の見通しが立たない」という声を耳にします。

やや実践知に寄った見方になりますが、不登校から社会復帰には、おおむね共通する「経過段階」があることが指摘されています。臨床医療、教育実践、経験談など、さまざまな角度から提案(5)がなされており、おおむね表1のようにまとめられます。

なお、各段階の分け方や呼び名は諸説あり、各段階の長さや変化の大きさにも個人差があることに留意が必要です。

(2) 筆者の不登校の経過

筆者の場合も、確かにこの表のような経過段階を踏みながら社会復帰に至っています。

第Ⅰ段階(小5秋～)：習い事の挫折、いじめ、担任や親との衝突、学校に行きたい気持ちと行動の矛盾に大きな混乱と行き場のない怒りを抱えた時期。

第Ⅱ段階(小5冬～中1)：自室での「睡眠・ゲーム・食事」の生活。孤立感、マイナス思考、プチ自殺、日々心がすり減っていくのを必死に耐えるだけの絶望の時期。

第Ⅲ段階(中1～中2)：ゲーム以外の玩具での遊び直し、休日の家族との外出、教育委員会からの派遣教員と出会った時期。

第Ⅳ段階(中2～高1)：部活動(陸上部)への参加。高校1年10月サポート校への編入学。自分が他者に受け入れられた経験を得た時期。

生活や内面の様相が、時期によって大きく変わっていくことが分かります。このプロセスがすべての子どもにあてはまるとは限りません。ですが、こうした道筋もあるのだと知っておくと、いまは第Ⅱ段階から寄り添いの支援を、第Ⅳ段階では新しい活動の提案をといた、支援の見通しと、何より子どもを落着いて見るヒントになるのではないのでしょうか。

(3) 正しさよりも「一緒に悩む」でいい

不登校の子どもに、各段階で「正しい」関わりをしなければ、と思われるかもしれませんが、それが「正解」という支援はないのです。大切なのは正解ではありません。たとえその瞬間は衝突や負の感情が起きたとしても、誰かが「本気で自分に向き合ってくれた」という実感が、経過段階を進めるエネルギーの蓄積につながっていきます。

悩むことは本来悪いことではありません。子どもも大人も、悩んで傷ついて、それでも向き合い続けた先に、その子なりの答えが必ず見つかります。「悩んでいいよ。一緒に悩むよ」と、子どもの心の隣に座ってくれる人が必要なのではないのでしょうか。



3 観点③ 進路の選択

(1) 学びの選択肢

進路については、子どもも保護者も不安を抱えています。中学校卒業後にも多様な学びの場が用意されています。

例えば、全日制高校では習熟度や希望進路別のコースを設けている学校、定時制では日中に授業する学校、通信制では個別・遠隔・対面授業を併用できる学校があります。また、中学校までの「学び直し」がカリキュラムに含まれている学校も存在します。他方、高校に進学せずとも、高等学校卒業程度認定試験に合格することで大学入試を受けることができます。

子どもの現状に応じて、焦らずに学びの場を選んでいくことが可能となっています。

(2) サポート校の経験

中学校卒業後の学びの場の選択肢の1つに「サポート校」があります。多くは「民間の教育機関」であり、サポート校で授業を受け、試験や課題をクリアすることによって、連携する通信制高校の単位を取得・卒業できる、というシステムになっています。

筆者もサポート校出身です。全日制より1時間遅く始まる時間割構成(午前3コマ、午後2コマ+曜日別の課外活動)となっていました。先生方は、基本的に教員免許を持っており、教育相談や不登校に理解の深い方々でした。生徒の多くが不登校経験者であり、お互いの距離感を分かり合える心地よい雰囲気がありました。授業や試験、学校行事は、全日制の高校とほぼ変わりません。部活動やサークルもあり、定時通信制高校の公式大会や、全日制も含めた練習試合にも参加できました。

社会に出る前の助走期間として、大変意義のある経験と学びをさせていただきました。

(3) 「社会的自立」とは

不登校支援の目的である「社会的自立」に明確な定義や解説はありません。ここでは、筆者自身の経験を交えて、その意味を考えてみたいと思います。

実は、私が「社会的自立」を実感したのは、大学3年生の秋です。教職課程の授業で、自身の不登校経

験を話す機会がありました。発表後に、「そんな世界があるとは知らなかった」「教員になる前に聞けてよかった」と、涙を流してくれた学生までいました。この時、弱い自分、挫折した自分、ダメだった自分が人の役に立てるのだと実感できたのです。すると、それまでの自分の中にあった心の澁みのようなもの、「また行けなくなるかもしれない」という漠然とした不安が、スッと消えていくのを感じました。自身の経験の生かし方を見つけることができ、真の意味で自立できた瞬間だったのではないかと考えています。

不登校開始から約10年後の出来事でした。他者から見れば、サポート校に通い出した高校1年生の秋に、不登校ではなくなっています。ですが、不登校との戦いは、私の中で、この時までずっと続いていたのです。「社会的自立」とは何か、それは本人しかつかめないものかもしれません。こうした意味でも、不登校の経験は、その人の人生に大きく影響するものだと思います。「その人がその人らしくいられること」、これを社会的自立の1つの姿であると捉えています。



4 現在の制度と本稿の接点

改訂版「生徒指導提要」「COCOLOプラン」「不登校・いじめ 緊急対策パッケージ」と、この2年間だけでも次々に不登校に関連した施策が打ち出されています。

これらの内容からは、学校教員に、これまでとは少し趣の異なる役割が求められていることが見えてきます。それは、子どもにとってより幸せな居場所を考え、つないでいく、「伴走者(ファシリテーター)」としての役割です。

多くの先生は責任感が強く、自身が直接子どもを救ってあげたいと思っています。それゆえ、時に、自身の支援がうまく機能していないと感じ、苦しみます。不登校の支援には大きな負荷と覚悟、そして専門性が必要であることは事実です。ぜひ1人でなんとかしようと思わず、外部のさまざまな選択肢に目を向けてみてほしいのです。

教科指導と生徒指導は両輪と言われます。いま、授業の在り方は「先生がいかに教えるか」から「子どもがいかに学ぶか」に変化しています。生徒指導にも、例えば校則を生徒自身が考えることをサポートした事例のように、これに似た視点(教員の伴走者としての役割)が取り入れられるのではないのでしょうか。「子どもの救い手になる」支援から、「子どもと共により良い道を探す」支援へ。本稿で述べてきたように、不登校の子どものあるのままを受け入れ、そのうえで一緒に悩み、そして居場所をつないでくれる、そういう先生の存在は、これからの不登校支援のまさに「要」(要点)であると思います。子どもに最も近い学校教員だからこそ担える役割と言えるのではないのでしょうか。

おわりに

不登校は、どんなに支援者が心を注いでも、短期での変化は見えずらい課題です。令和4年度の文科省調査^⑥でも、不登校のうち、学校復帰に至ったのは27.2%です。また、支援つながっていない子どもが36.6%も存在し、その割合は、例年変化がありません。これは大きな課題と捉えています。

支援者の想いは必ずその子どもの奥底に届き、時間をかけて浸透し、そして、少しずつ蓄積されていきます。自分が関わっている期間に目に見える進展はないかもしれませんが、ですが諦めずに、手を差し伸べ続けてほしいと思います。

筆者が今も大事にしている、不登校の経過第Ⅱ段階の孤独と絶望の日々の中で、ボロボロの心で抱いていた思いがあります。この言葉で本稿を締めさせていただきます。

「先生でもいいから、友達が欲しい」



引用文献

- (1) 樋口 進 [監修] 『ネット依存・ゲーム依存がよくわかる本』 講談社 2018年
- (2) NPO法人 eboard HP: <https://info.eboard.jp> (2023年10月23日 URL 確認)
- (3) 今村久美 『NPOカタリバがみんなと作った不登校一親子のための教科書』 ダイヤモンド社 2023年
- (4) フリースクール全国ネットワーク 『フリースクール白書2022-想像ではなく「数字」で見る-』 学びリンク 2023年
- (5) 藤枝静暁 『不登校・登校しづり 親子によりそうサポートBOOK』 ナツメ社 2023年
- (6) 文部科学省 「令和4年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」 2023年